

資料館だより 平成四年六月二十四日から七月一九日まで当館は鈴鹿市市制五〇周年行事の一翼として「けんらんたる一族一門の歌集」展覧会を催しました。すなわち、信綱先生寄贈にかかる石薬師文庫旧蔵本、先生没後に嗣子文綱氏から贈られた遺愛の歌集九〇〇余冊、林大氏島綾野氏杉山りつ氏らの寄贈本等々数百冊、それに治綱由幾氏夫妻と令息幸綱先生とが育成された竹柏会現役歌人等、まさに「けんらんたる」収蔵歌集から三〇〇余冊を精選して系統的に展示しました。記帳された来館者は延三五〇余、幸いに当館の方針である「入場無料、ケース外の図書は自由に手にとって閲読されるように、写真撮影を禁じない」の三つが熱心な来館者に好評で、信綱先生の処女歌集の『思草』（明治三六年刊定価五〇銭）など、特に多くの人々の手にとられていました。今回のために特製した一族一門大系統図は受付で配布する目録にも掲げられ、現在も希望される見学者もあります。特に、恒例の特別講演「歌はまことの声―佐佐木信綱から俵万智まで―伊藤一彦氏」は超満員の盛会で、遠く東京神奈川静岡等から見えた聴講者にも嬉んでいただくことが出来ました。


ここに、遠く九州からお出でくださった伊藤先生、貴重な御蔵書をこころよく提供して下さった青木信氏、この企画のため歌集を寄与して下さった多数の竹柏会々員諸氏に感謝致します。(佐佐木信綱資料館 伊藤 智)

卯の花の里だより 日頃は毎日といってよいほど石薬師小学校の正門前を通ります。そうすると、自然と信綱先生が還暦を自祝して故郷に贈られた石薬師文庫、生家、そして貴重な資料が収蔵展示されている資料館が軒を並べて建てられているのが眼に入ってきます。

それらに対し、これまでの私たちはあまりにも無関心過ぎました。それを石薬師地区の「大切な私たちのもの」と自覚させて下さったのが、前石薬師出張所の山崎崎さんでした。唱歌「夏は来ぬ」に因む「卯の花の里づくり」の熱心な推進者であった前所長さんは、私たちに卯の花のさし木に参加することを呼びかけ、その意識を高めるため身体で働くことを教えて下さいました。それがきっかけで卯の花の押し花の葉を作って来館者にお頒けしたり、「卯の花餅」を作って遠方からの来館者をもてなすなど、資料館に足を運ぶようになりました。

信綱作詞校歌集を編む中で、講演会や短歌作り、また信綱歌碑巡り等の楽しい行事を計画して下さいました。この度の御栄転に心からお礼を申し上げます。

心の花全国大会に、お土産として配った卯の花の苗木も日本のあちこちでこの春にはきつと可愛い花を咲かせてくれたことでしょう。これからの『卯の花の里づくり』に、私たち女性学級が少しでもお手伝いできればと思っております。(石薬師女性学級 佐々木美智代)

	
目次	文化財的施設の一つの在り方
信綱一首(三)	展示室だより(夏目漱石の手紙)
卯の花の里だより	資料館だより(特別展の報告)
(山崎さんのこと)	(山崎さんのこと)
寺田 悟	寺田 悟
注 正	注 正
伊藤 智	伊藤 智
佐々木美智代	佐々木美智代
千五三三 鈴鹿市石薬師町一七〇七	千五三三 鈴鹿市石薬師町一七〇七

文化財的施設の一つの在り方 寺田 悟

私は長く、市役所の広報関係を担当してきました。その視点から、文化財の「保護」の一面について記します。

毎月二回、各御家庭にお届けしている『広報すずか』の実質一三ページをよく読んでいただければ、鈴鹿市がどんなに文化行事の振興と文化財の保護とそれを収納する施設の充実とに努力しているかがお解りいただけます。

しかしそれらの文化的施設は地味で人目に立つ華やぎはなく、見学には多少の予備知識さえ必要となりますので近くに住まわれながらつい訪れる機会を自分で逃すお方もありでしょう。大黒屋光太夫資料室・伝統産業会館・前川定五郎資料室等がそれであり、この佐佐木信綱資料館もその一つだと思います。

最小限の予備知識―それは「信綱」という人が明治大正昭和三代にわたり九二歳の長寿を生き、しかも息を引き取るその日まで作歌と研学とに不撓の生命力を燃やし続けた一鈴鹿びとであったということ、そして近代短歌史一〇〇年

と万葉集研究史一〇〇〇年の上に不滅の足跡をのこし、その偉業は今も生きていくことであります。

そういう特殊な人物の資料館でありますから、逆に、この施設の「保護」はその「活用」にあると考え開館以来六年をささやながら努めてきました。まず、「本は読むもの」という信綱の遺訓を実践して書物はなるべくガラスケースの外に出して自由な閲読に供し、写真撮影も禁じていません。然るべき機関が正規の手続きを踏んで下されば資料の貸出しにも協力してきました。山梨県への芥川竜之介・岡崎市への弘綱信綱父子・京都市への九条武子などであります。毎年の特展と記念講演会もこの意味で好評を得て今日まで根付いてきました。

個々の利用面でも、京都府立大の先生が当館所蔵のB・H・チェンバレンの文献を紹介なさったこと、中日系の婦人記者が敗戦のころの歌集の紙が余りに粗悪なのに驚いて、再生紙(仙花紙)の問題を提起されたこと等、文化財活用の一例といえます。この館を利用した卒業論文の第一号は、皇学館大学の女子学生さんでありました。この施設の保護は、その活用にあります。(文化財保護課長)

展示室だより 前号では、「憂愁の歌人」とうたわれた才媛、九條武子の手紙を紹介したが、今回は名作『坊ちゃん』『草枕』『それから』等で有名な明治文壇の巨星・夏目漱石（本名、金之助）を取り上げた。

・読み方 句読点を付し、適宜ふりがなをつけた。

拜復 御手紙を拝見致しました。御配慮御尤ものやうに考えます。然し大塚君は断わる時にそんな気の毒な思ひをせずに済む人らしいのですが如何なものでせう。

尤も形式上から云へば、いつ断つても一向差支ないやうにはなつてゐるものです。つまり、大塚君は此点に關して思慮分別が缺乏してゐるのではないのだから、当人の随意で構はないかとも考えます。

尤も家庭教師としてゐるうちにそれ以上の精神上又は肉体上の關係が起ると想像すれば又問題が違つて参りますが、それは多分なにかと思ひます。細君の候補者は佐々木さんに頼んだら好



からうと申しましたが、無ければ已（む）を得ません。私の方では是といふ人は持ち合せないのです。交際の狭い私の胸の中にそんな人が出てきたら固より大塚君に申入る積（り）で居ります。あなたも、どうぞ御心掛下さい。以上

二月二十七日

夏目金之助

佐々木様

△封筒の裏書き▽

牛込 早稲田南町七

夏目金之助

二月二十七日

△略注▽ 当資料館が所蔵するこの手紙は、大正四年（一九一五）二月二十七日に書かれたもの、時に漱石四十九歳・信綱四十三歳、大塚保治は四十七歳、その妻大塚楠緒子（くすおこ）は、すでに五年前の明治四十三年、三十五歳の若さで死んでいる。保治は旧姓小屋、東大哲学科に進み、いわゆる恩賜の銀時計を受けて卒業、大学院では美学を専攻、当時の東京美術専門学校長岡倉天心に師事、将来を属望された俊秀。漱石と特に親しく信綱とも交際があった。二十七歳で、法曹界の重鎮、大塚正男の養子となり、その長女楠緒子と結婚した。門下には彼の美学を發展させた島村抱月、大西克礼、阿部次郎、土方定一、その他多くの人材が現れ、芥川龍之助、岡崎義恵らも影響を受けている。

さて、この文壇・学界の文字通り第一人者たちに関わるこの手紙の内容は、何かはなほだ世俗的であり、漱石もどこか迷惑げであり、信綱の方からもどうも詰問的な交渉があったようにも想像できないことはない。この手紙の背景については前年の十二月三日付の漱石からの書簡が「明治文学の片影」（中央公論社版）に載っているが、それによると楠緒子の死後、保治と養家との間に気まずいことが起つたらしく、信綱は「その事には、初め大塚さんの数人の友人が関つてゐたが、最後には大塚博士の友人としての夏目さんと、楠緒子夫人の歌の師としての自分とだけが残るやうになり、自然訪問し合ふ機会が多くなつた」と極めて控えめに記しているだけである。

この大正三年の手紙は候文で長く、どこかとげとげとした応酬めいたものさえ感じられ、楠緒子の死後、その才と人とを深く愛して認め合った漱石・信綱の二人の恩師が、少なくとも愉快ではない交渉を重ねざるを得なかつたのでは大塚楠緒子は類いまれな文才と美貌に恵まれ、加うるに

明治官界の高名な家庭を背景に一世を風靡する才媛ともてはやされた。与謝野晶子に「君死にたまふこと勿れ」があれば、彼女には厭戦詩「お百度詣」がある。あまりにも惜しい夭折の後に、夫と二人の恩師とが不快げに相對するのを見ると何か宿命的なものを感じてならない。

有る程の菊抛げ入れよ棺の中

漱石

ひと年は語らむことの多かるを青踏うまれノラもうまれして名高い。

信綱

句は葬儀の日に、歌は一周忌に、ともに二人の師の傑作として名高い。

※参考文献 漱石文学全集（集英社版）の研究年表、日本近代文学辞典（講談社版）日本文化史年表（岩波書店版）作影八十二年（毎日新聞社版）明治大正昭和の人々（新樹社版）明治文学の片影（中央公論社版）等。以上、漱石側の研究や資料には全く触れず、あくまで表面的な解説に過ぎぬことを明記して、おゆるしを乞いたい。

（文化財保護課 辻 正）

信綱一首・3

道の上に残らむ跡はありもあらずもわれ度みてわが道ゆかむ

昭和四年刊、第四歌集『豊旗雲』の序歌。時に五八歳である。書名のように雄大清澄な志操歌に富む。度むは単なる謹慎ではなく、深い恭虔の意。第二句、初版本以来暫く「残さむ」であったが、八年後の自選集『天地人』では「残らむ」と訂めた。歌と学とが円熟に向かう道程における、ある心の軌跡か。（村田邦夫）